

分子の音色

| A scientist and a musician |

中村栄一 / 渡邊順生

ナレーター：シシド・カフカ

公式サイト

<https://bunshi-no-neiro.com>

上映館:ポレポレ東中野

<https://pole2.co.jp>



17期生の中村栄一さんと渡邊順生さんを追ったドキュメンタリー映画
「分子の音色 A scientist and a musician」が10月16日から公開されます。

好きなことを発見して、自分で決断する。そして、やり続ける。そうしてきた二人の人生が、今の世の中の閉塞感を静かに切り裂いていきます。70歳を迎えた中村さんは有機化学者として、渡邊さんは古楽器奏者として、ともに70歳を迎えた彼らには本物の「個人」の姿が潜んでいます。2020年8月、蓼科の小さな音楽堂で二人は初めて一緒にバッハを演奏しました。

バロック時代のフルートとチェンバロを演奏する二人を結ぶものは何か? 「化学」と「音楽」という別々の道を歩いてきた二人を貫くものは何か? その源泉が培われた教駒(筑駒)時代に遡ります。自由な校風と個性的な恩師、10代の二人が学んだのは「既成の価値観に囚われるな」ということでした。そして蓼科でまた交わる二つの道。映画では、教駒(筑駒)のエピソードやお話がたくさん出てきます。ぜひ、劇場でご覧ください。

ナレーターは今注目のシシド・カフカさんです。



当時の渡邊さん(左)と中村さん(右)



お二人の担任福岡先生



音楽の多田先生

数十年ぶりに母校を訪ねる2人のシーンから





PROFILE

中村栄一 Eiichi Nakamura

東京大学特別教授・名誉教授/1951年生まれ。鉄や炭素などの「ありふれた元素」の機能を活用する合成化学、そして原子分解能電子顕微鏡を活用した「映像分子科学」の開拓などで世界を先導する化学者。中学時代の恩師の影響を受けて17、18世紀の音楽への新しい取り組みに興味を持ち、それ以来、音楽演奏を続けている。米国芸術科学院外国人会員、紫綬褒章、藤原賞など受賞。



PROFILE

渡邊順生 Yoshio Watanabe

古楽器奏者(チェンバロ/フォルテピアノ)/1950年生まれ。一橋大学を卒業後、アムステルダム音楽院にてチェンバロをグスタフ・レオンハルトに師事、1977年最高栄誉賞付ソリスト・ディプロマを得て同音楽院を卒業し、更にプリ・デクセランスを受賞。欧米の名演奏家・名歌手等と共演多数。コジマ録音より多数のCDをリリースし、2006年及び2016年のレコード・アカデミー賞を受賞した。2010年度サントリー音楽賞受賞。

杉本信昭監督から

二人ともごく普通の人だ。苦しみも喜びも全てが自分。答えのない世界を歩き続け、試行錯誤を繰り返し、それでもきっと楽しいと思っている。中村さんと渡邊さんの言葉を通して「今、自分で考えて自分の行動を行うことがちゃんとできているだろうか」と皆さんに問いかけたいと思います。予告編のラスト「無謀と言われても、時間がかかっても、キミが決めたキミの一步には踏み出すだけの価値がある。」これは中村さんと渡邊さんから映画が抽出した若い皆さんへの言葉です。

中村栄一さんから

今に至るまで続く化学・科学、音楽、美術、山歩き、工作、鉄道、歴史と世界への興味など、すべてが教駒での経験を通して培われたものだ。このコロナ禍で、研究室全員が大学に籠もり、良く実験し、良く議論をして研究に没頭した。そこで頭にふと浮かんだのが、古稀の記念に渡邊君とコンサートを開くこと、それを記録に収めることだった。それが杉本監督のマジックにかかり、今般、21世紀を切り拓く世代へのメッセージとなった。これは教駒で暮らした仲間へのエールでもある。

渡邊順生さんから

この映画の製作を通じて、駒場における中学高校時代の様々な体験が、いかにその後の自分の人生の起点になっているかを痛感しました。昨年秋には、母校の音楽室や化学室に五十数年ぶりに足を踏み入れたことで、遠い昔の思い出が一気に蘇りました。この映画のきっかけになった音楽会については、昨年の若葉会会報に書かせて頂いたので是非お読み下さい。その上でこの映画をご覧になると、いろいろな経緯がよくわかり頂けると思います。この映画を、皆さん自身の人生を振り返るよすがとして頂けると嬉しいです。

詩人 谷川俊太郎さんから

意味以前の存在、バッハの音楽のように言葉では置き換えられないリアリティ、お二人の生き方にもこの映画そのものにも、たたくまいとしか呼べない在り方を感じます。谷川俊太郎